

マルシェノルド

開発こうほう／地域経済レポート特集号

Hokkaido Development Association 21世紀、もっと輝く北海道へ

NO
668

March.2019
3月号

テーマ 進化する図書館



Public Libraries in Progress

●地域経済レポート特集号／REGIONAL ECONOMIC REPORT

マルシェノルド

第42号



進化する図書館

2008年6月の図書館法改正を前に同年3月号の『マルシェノルド』では、「地域と図書館～新しい時代の図書館像を探る～」をテーマに、地域を支えるこれからの図書館像を探りました。それから10年が経過し、近年はさらに進化した図書館づくりが進んでいます。道内の公立図書館の新しい動きを紹介します。

Contents

巻頭エッセイ

- 図書館が面白くなってきた 1
マルシェノルド編集主幹 小磯修二

インタビュー

- まちづくりと図書館～コミュニティの中の図書館～... 2
ジャーナリスト・文筆家 猪谷千香氏

レポート

- データで探る北海道の公立図書館 10

地域事例1

- 個性あふれる図書館づくり
～札幌市の新しい図書館～ 14

地域事例2

- 連携と情報発信で、まちを笑顔に
～移転を機に“つながる”図書館を実践する滝川市立図書館～ ... 20

地域事例3

- 図書館を核にしたまちづくりへの挑戦
～地域の力を生かす、幕別町図書館～ 25

お知らせ

- 土木技術者のための講習会開催のご案内 (CPDS対象) 30
お知らせ 31

表紙の切り絵作家

三苦 麻由子 Mayuko Mitoma

東京都出身。武蔵野美術短大卒業後、広告代理店勤務などを経てフリーに。1994年札幌へ。みとまゆこのペンネームで、水彩、ペン、墨絵、切り絵など、さまざまなタッチでジャンルにこだわらず活躍中。本誌の表紙は、本号テーマ・イメージによるオリジナル作品。

図書館が面白くなってきた

マルシェノルド編集主幹 小磯 修二

マルシェノルドで図書館をテーマに取り上げるのは2008年3月号に続き、今回で2回目となる。マルシェノルドの創刊は1999年だが、これまで原則として同じテーマは取り上げてこなかった。しかし、20年目を迎えたことを機に、過去に扱ったテーマも時間経過の中でその役割や意義が変化してきたものについては、新たな視点と問題意識で考察していくこととした。

10年前の公立図書館はややもすれば貸本の施設か、学生の勉強空間として受け止められていた。一方で、地方財政の厳しさなどからそのあり方が見直され、地域の課題解決支援や調査研究の要請に応じていくべきという「役に立つ図書館」を求める流れが出てきた時期でもあった。そこで、マルシェノルドでは「地域と図書館～新しい時代の図書館像を探る～」というテーマで、地域における情報拠点、知の拠点としての図書館の役割を探っていった。

前回の取材で忘れられない出来事があった。それは当時片山善博前知事の指導で積極的な改革を行い、自治体の政策立案支援やビジネス支援に向けてさまざまな挑戦をしていた鳥取県立図書館に出向いたときだった。ちょうど私たちが取材で訪れた際、図書館に地元の若桜^{わかさ}鉄道の存続活用に向けた相談があった。たまたま私が北海道で長く地方鉄道の問題に関わっていたことを担当者が知ると、取材後すぐに若桜町役場に強引に連れていかれ、そこで存続に向けた検討会議に参加させられたのだ。使えるものは使い倒すという理念が徹底しており、これが図書館かと驚かされたが、地域のために奮闘しているスタッフの思いが身をもって伝わってきた貴重な経験であった。

今回は、北海道内の公立図書館にアンケート調査を実施して10年間の変化を分析するとともに、各地の挑戦事例を紹介しながら、進化する図書館の実態を追っていった。この10年間で、さまざまな創意工夫を凝らした取り組みが全国各地で行われるようになった。今回の事例はすべて北海道内の図書館を選んだが、取材先の選定には正直苦労した。実際の取材でも、これまでの図書館のイメージを超える発想と取り組みに出合うことが多く、驚きの連続であった。事例で紹介したとおり、「働く人が悩んだときに解決のヒントを与えてくれる」（札幌市図書・情報館）「乳幼児向けのデジタル絵本を使ったプログラミング体験」（札幌市えほん図書館）、「勝手にコラボ」（滝川市立図書館）、「ストレスチェック」（幕別町図書館）と、刺激に満ちた楽しい取り組みが各所でなされていた。また、印象的だったのは出会った図書館職員の人たちが、本当に生き生きと楽しく自発的にアイデアを駆使しながら働いている姿であった。10年前に鳥取県で体験した地域のために奮闘する意欲、姿勢が、北海道内の各所でしっかり根付いてきていることを実感することができた。

着実に図書館は面白くなっている。それを支えているのは、「与えられた仕事を均一にこなす仕事」から「地域のニーズに応えながら創意工夫を活かせる仕事」へという図書館に携わる人々の意識の進化であろう。

インタビュー

まちづくりと図書館 ～コミュニティの中の図書館～

全国各地で、今までの印象を変える図書館が出てきています。課題を解決するためにさまざまなサポートをしてくれるレファレンスサービス、高齢化社会や障がい者のニーズに細かく対応してくれる運営、生涯学習や青少年・市民活動などの支援機能を合わせ持った複合施設での展開など、まちづくりの中で重要な役割を果たしている図書館もあります。

そこで、全国各地の図書館取材して2014年に『つながる図書館—コミュニティの核をめざす試み』を出版された猪谷千香さんに、こうした図書館の動きについてお話をお聞きしました。

(インタビュー日：2018年12月12日)

きっかけは東日本大震災

——猪谷さんの著書『つながる図書館—コミュニティの核をめざす試み』では、全国各地の図書館を大変丁寧に取材されています。猪谷さんが図書館に関心を持ったきっかけは、何だったのでしょうか。

猪谷 私は大学の専攻が考古学で、以前から図書館のヘビーユーザーでした。大学図書館に加え、そこにはない資料があればいろいろな図書

ジャーナリスト・文筆家
Chika Igaya

猪谷 千香氏



館に行っていました。大学卒業後は新聞社に入社し、リサーチのために図書館を利用していました。東京勤務だったので国立国会図書館、都立図書館、区立図書館、大学図書館など、あちこちの図書館に通いました。その生活が日常的だったので、図書館を取材対象に考えていませんでした。

図書館を見つめ直すきっかけになったのが、東日本大震災です。震災当日、私は産休を取ったばかりで、自宅でテレビやインターネットのニュースを見ていました。あのような未曾有の大災害では、最初に復旧しなければならないインフラがあります。ところが、それとほぼ同時に全国から被災した図書館に救いの手をさしのべる人が現れていました。図書館関係者や図書館好きの人がインターネット上でつながって、一種のムーブメントが起きていて、電気が完全に復旧していない中で仮開館する被災地の図書館もありました。

人間は本を読まなくても生きていけるはずなのに、なぜみんな図書館を欲しているのか、とても不思議に思いました。そこから、私たちの社会やコミュニティの中で、図書館はどういう役割なのか、みんなの心の中でどんな存在なのかを考えるようになりました。

当初は、震災をどうやって記録し、未来に伝えていくのかという方法に関心がありました。動きが早かったのはグーグルやヤフーで、インター

ネット上に掲載された写真や動画を集めて公開していました。そのうち図書館や博物館、大学などの機関も収集を開始し、今ではそれらを横断する「ひなぎく」という国立国会図書館東日本大震災アーカイブにまで成長しています。

図書館の機能の一つは、人の記憶を伝えていく、歴史を伝えていくことで、それが非常に重要であると実感しました。

全国に影響を与えた^{たけおし}武雄市図書館

——ご専門の考古学の問題意識と共有する部分があったのですね。これからの地域社会は急速な人口減少、高齢化を迎えますが、このような厳しい時代の中における、図書館の役割や可能性をどう考えていますか。

猪谷 皆さんの図書館のイメージは、ベストセラーや小説がそろっていて、本を借りたり、読んだり、勉強したりするところというものでしょう。しかし、それがこの15年ほどで激変しています。

その背景はいくつかあります。一つは政治の流れです。地方分権改革によって、例えば以前の図書館長は司書資格が必要でしたが、その制約がなくなり、多様な人材を館長に迎えられようになりました。また、小泉政権時代には指定管理者制度が導入されました。指定管理



者制度は賛否両論ありますが、民間企業が図書館を変えたことは間違いありません。カフェの併設や開館時間の延長、休館日の減少など、民間的なサービスを提供してくれる図書館が増えてきています。

また、コミュニティの中でも自分の居場所がない人たちを受け止める場所として、図書館に期待をかけているところが増えてきているように思います。

図書館は黙っていても一定数の人がやってくる施設です。図書館を集客装置ととらえ、まちおこしや観光を連動させて、まちづくりの核にしていこうという動きが自治体から出てきても不思議ではありません。

そのようにいくつかの流れの中で、現在のような多彩な図書館が各地で花開いたという状況だと思います。

——図書館の魅力を高めていく動きとともに、政策の仕組みが変わっていく中で、図書館が変化していった側面があるわけですね。指定管理者制度も大きな転換点だったといえるのでしょうか。

猪谷 全国の自治体に影響が大きかったのが、佐賀県の武雄市図書館です。武雄市は人口5万人程度のまちで、「TSUTAYA」を展開してい

るカルチュア・コンビニエンス・クラブ(株) (CCC) が指定管理者を受託しました。2013年4月に図書館がリニューアルオープンし、スターバックスコーヒーの併設やエンターテインメントの要素を組み入れた空間などで来館者数を伸ばしました。図書館のあり方として議論はありますが、初年度の来館者数は92万人超になりました。しかも、市外からの人が多かったのです。わがまちにもそんな施設があれば、外から人が来てくれると期待する首長や議員が出てくることは必然でしょう。実際、その後、全国にTSUTAYA図書館が出現しています。図書館運営はCCCと組まなくても可能ですから、TSUTAYA図書館を参考に、独自で運営してまちづくりの核に据えていく動きも盛んです。

——武雄市図書館は賛否両論がありますが、あの集客力は画期的なことでした。武雄市図書館をきっかけに新たな図書館づくりの議論が加速し、新しい挑戦をする図書館が出てくるようになったと感じます。

猪谷 図書館に対して確固たる理念を持っておられる方からすれば、あのような図書館のあり方は論外と思われるでしょうが、集客装置の役割を担った図書館に魅力を感じる人たちがいることも事実です。

また、日々のニュースの中で、あそこまでマスメディアに登場した地方の図書館は、今までになかったと思います。

——既成概念を打ち破ったという点では北海道旭川市の旭山動物園に似ていますね。動物の行動や生活を見せる展示形態で一気に来園者数が増えました。

一方で、これらは行政の施設ですから、運営では首長の意向が反映されます。図書館に首長の理解があるかどうかは大きな要素でもありますね。



指定管理者制度を考える

猪谷 図書館が変わる一つのタイミングは、やはり選挙だと思います。例えば、立候補者が子どもたちのために図書館改革をします、もっと魅力的な図書館をつくりますと言うと、反論しづらいでしょう。実際、新しい図書館ができる、初年度は必ず人がたくさん来ますし、メディアもニュースに取り上げますから、成功しているかのように見えます。ですから、人気政策として積極的に図書館を活用している面があると思います。

ただ、運営では、財政面から指定管理者制度を導入しているところもあります。本来の目的ではないのですが、主にコストカットの意味で指定管理者を採用している例が見受けられます。

——指定管理者制度が導入されて一定の期間が経過しましたが、現在の様子をどのように受け止めていますか。

猪谷 指定管理者制度は2003年に導入されましたが、採用している自治体の理由はさまざまです。

利用者の立場からは、確実にサービスが向上していると思います。以前は自治体職員がカウンターにいても愛想が悪いなど、評判が良くありませんでした。でも、民間のサービスは接客も良く、非常にサービスが向上しました。自治体としても、市民受けする図書館を運営できていることになります。

でも、図書館の現場で働く司書からすると、不安定さを感じていると思います。指定管理者は3年や5年の契約が多いのです。本来の図書館は長期的な計画のもとに運営されなければいけません。図書館に指定管理はなじまないという批判は制度導入時からの主張で、それには一理あります。また、非正規雇用の増加にもつながるという問題も指摘されています。

このようにメリットもデメリットもあるのですが、デメリットが解消されていないことが問題です。しかし、導入から15年も経過し、これだけ浸透してしまうと、すべての指定管理者図書館を自治体直営に戻すことは難しいでしょう。

そこで、一つの方向としては、指定管理者制度で働いている人たちの雇用と地位を安定させ、かつ長期的な運用をどのように確保していくかということを検討していくべきではないかと思っています。

——図書館運営は自治体の行政サービスの中でも大切な分野の一つです。図書館は蔵書やその情報を生かして、知的生産を営んでいく地域のインフラですから、個人的には外部に委ねることは慎重であるべきだと考えています。仮に指定管理者制度を導入する場合は、長期的に安定して司書などが仕事が続けられるような環境を定着させるべきでしょう。

猪谷 2015年8月26日に鎌倉市図書館がツイッターで「もうすぐ二学期。学校が始まるのが死ぬほどつらい子は、学校を休んで図書館へいらっしゃい。マンガもライトノベルもあるよ。一日いても誰も何も言わないよ。9月から学校へ行くくらいなら死んじゃおうと思ったら、逃げ場所に図書館も思い出してね」という投稿をしています。2学期が始まる直前は、自殺をする子どもたちが一番多い時期です。それを知った司書が、死ぬほど学校がつらい子は図書館にいらっしゃいと呼びかけたのです。それが共感を呼んで10万件以上のリツイート^{※1}があり、テレビや新聞でも取り上げられました。これこそ、みんなが期待している図書館の役割の一つだったと思います。

ところが、教育委員会で不登校を助長するのではないか、投稿を削除すべきだという議論になったそうです。結果的には図書館側が自殺防止のためのツイートだったことを説明し、削除さ

※1 リツイート

ソーシャルネットワークサービスのツイッターで、ほかのユーザーのツイート（つぶやき）を引用形式で自分のアカウントから発信すること。

れませんでした。鎌倉市図書館は直営なので司書は正規職員でしたが、ツイートした司書が指定管理者の非正規雇用の職員であれば責任を問われていたかもしれないと感じました。

直営で正規の司書であるという立場の強さは、図書館の独立性にもつながってくるので、そこはとても大切な部分だと感じました。

——図書館の立場でしっかり主張できる仕組みが必要ですね。図書館の役割の変化に対応した自治体政策のあり方を議論していくことも大切でしょう。

まちづくりの核になっている紫波町^{し わ ち ょ う}図書館

——著書ではまちづくりを担う図書館の事例を多く紹介されていますが、『町の未来をこの手でつくる 紫波町オガールプロジェクト』の岩手県の紫波町は、域内循環にこだわった先進的な取り組みをしているまちですね。

猪谷 紫波町図書館は若手農家のコミュニティの場になるイベントを仕掛けたり、農家を紹介する企画展を行ったり、2012年の開館当初から農業支援サービスを手がけています。当初は、まちの産業を図書館が支える試みに興味があって取材を始めました。

紫波町は人口3万3千人ほど、紫波中央駅前に広がっていた10.7haの町有地を開発する一大プロジェクトが「紫波町オガールプロジェクト」です。オガールとは成長を意味する紫波の方言「おがる」とフランス語の駅を意味する「Gare（ガール）」などを組み合わせた造語ですが、町や町民がここで育っていくという意味が込められています。

役場庁舎やマルシェ、住宅や体育館などの施設がありますが、その核の一つが紫波町初の図書館でした。そこに図書館をつくることは、町としては絶対譲れない要素の一つでした。

このプロジェクトは2009年2月に策定された「紫波町公民連携基本計画」のもとに進められました。紫波町の諮問機関である「経営品質会議」に、31歳という若さで委員に抜擢されたのが、キーパーソンの岡崎正信さんです。彼は地元の建設会社の跡取り息子で、特殊法人地域振興整備公団での勤務経験があります。各地の都市再開発事業を手がけていて、日本の再開発は建物や道路などのハード整備を優先することに疑問を抱いていたようです。また、アメリカでPPP（官民パートナーシップ）や公民連携の開発が成功していることを知り、帰郷後に東洋大学大学院に入学して公民連携の知識や技能を学び直し、町内で公民連携を提唱した人です。

こうしたプロジェクトを進めるには町役場と民間の足並みがそろわないとうまく進まないのですが、非常にうまくハンドリングされていました。また、外部の景観デザイナーや建築家など、第一線で活躍している専門家を巻き込んだデザイン会議を設置し、景観やサイン、住宅のたたずまいなど、デザインがブレないように徹底しています。

そうやって出来上がった空間はとても居心地が良く、中心にある「オガール広場」が核になって、その周りに建物があり、今では年間約100万人が訪れるエリアになっています。

図書館づくりでは、町役場の皆さんが熱心に各地の図書館を視察しています。また、鳥取県立図書館と並んでビジネス支援で定評のある秋田県立図書館の副館長にお願いして優秀な司書を紹介してもらうなど、紫波町にふさわしい図書館を実現するためにいろいろな努力をされました。

紫波町図書館は地元の人に愛されているだけでなく、電車で20分かけてわざわざ盛岡市からやってくる高校生もいるそうです。それだけ居心地がいいのだと思います。

また、オガールの敷地内にある役場庁舎や

住宅には、エネルギーの地産地消を目指して、バイオマス燃料を利用した熱を供給して給湯や冷暖房に使われています。これらの住宅は「紫波型エコハウス」と呼ばれていますが、その施工は町内の工務店が担い、他の地域に負けないう、技術力や競争力を高める一助にもなっています。

——域内循環を実践するまちとして、20数年前から紫波町には着目していましたが、その精神はしっかり引き継がれていますね。地域の資源に魅力と付加価値を付けていくまちづくり戦略の延長線上に図書館も位置付けられているようです。

世界にも発信できる甲州市立勝沼図書館

猪谷 先日訪問したのが、「Library of the Year 2018」で大賞とオーディエンス賞を受賞した甲州市立勝沼図書館です。1996年に開館した図書館で、当初からぶどうとワインの資料を集めています。一般貸出を行う図書館で、ぶどうとワイン関連の蔵書量は日本で随一の規模です。日本十進分類法で分類していますが、ぶどうとワインについてはさらに細かく独自の分類をしていて、東京のレストランのソムリエなどワイン関係者がそこで勉強していくそうです。

——そこに行けばぶどうとワインをすべて学ぶことができるという特色を目指しているのですね。

猪谷 海外のワイン雑誌や一般に流通しない学会誌もそろっています。地元ワイナリーの皆さんも図書館で情報を得て、いかに自分たちのワインの付加価値を高めるか、海外に輸出するにはどうするかなど、そこで学んでいます。

司書の皆さんは、新聞を毎日チェックしてぶどうやワインに関する記事があれば切り抜いて

スクラップするなど、地道な資料収集活動が続けています。そんな情報の蓄積は他にありません。地元ワイナリーの情報も個別のファイルがあり、ワイナリーのパンフレットや航空会社の機内誌に掲載された記事まで所蔵されています。観光客もワイナリーのことを知りたければ、ここを訪れるといいと薦められるそうです。

また、図書館でワインを試飲できるイベントを開催するなど、日常的にワイナリーとお付き合いをしているからこそできる取り組みをいろいろ実践しています。

そのように、地道にまちを支えている図書館が全国にあることを多くの皆さんに知ってほしいですね。

——甲州市立勝沼図書館は世界中から人を呼べる魅力があり、地方の図書館が目指す一つの方向といえますね。

図書館は書店や出版社とも連携を

——図書館をめぐる動きの一つにデジタル化があります。書籍がデジタル化していく流れに、図書館はどう向き合えばいいのでしょうか。特に、地方では難しい命題です。

猪谷 デジタル化はなかなか進んでいない状況だと思います。2007～12年、長尾真館長時代に国立国会図書館が大規模なデジタル化を実施しましたが、その後はあまり明るい話題を聞いていません。



※2 kindle

アマゾンが開発・販売している電子書籍リーダーのこと。電子書籍データを含めて指すこともある。

まず、著作権の壁が厚いという問題があります。でも、kindle^{※2}でしか出ていない本もありますから、そういったデジタル書籍をどのように収集していくかは、大きな課題で、難しい問題だと感じています。

——北海道では早くから札幌市中央図書館がデジタル化に取り組み、古書などを公開するデジタルライブラリーのほか、電子書籍の貸出ができる電子図書館を開設しています。また、その動きに呼応して2013年には地元の出版社が集まってデジタルコンテンツを図書館に提供するために、一般社団法人北海道デジタル出版推進協会が発足しました。これはその後、地元の出版社と図書館と地元書店が連携を深めていくことにもつながっています。これからは図書館も書店や出版社と連携していくことが重要だと感じています。

猪谷 図書館と書店がコラボレーションする動きは出てきています。特に地方での書店経営は厳しいので、図書館が本を購入するだけでなく、一緒にイベントをする例が出てきています。図書館と書店、そして出版社は、本の文化を伝え、読書の推進やその環境を盛り上げていくために協力できることはたくさんあると思います。

青森県八戸市では自治体直営の書店「八戸ブックセンター」ができています。民業圧迫だと批判はありましたが、実際に開店してみるとや

はり品ぞろえが違います。市内の書店はコミックや雑誌などの売れ筋といわれる本が多いのですが、八戸ブックセンターには大型の美術書や読書好きな人が手に取りたくなるような本が並んでいて、差別化されています。また、市内にある書店員が魅力的な棚づくりを学ぶ場にもなっています。

まちに本好きな人を増やし、八戸を「本のまち」にするために、本のある暮らしの拠点が八戸ブックセンターなのです。今はまだ図書館が関わっている取り組みはないようですが、今後は図書館との連携が生まれてくるだろうと期待しています。

八戸ブックセンターで面白いのが、店内にある「カンヅメブース」です。市民作家として登録をすれば安価で借りられる部屋で、文字通り「カンヅメ」になって執筆ができる空間を提供しています。地元で作家を育てていこうという狙いがあり、高校生からシニアまでいろいろな人が登録しているそうです。そういう場があるかないかで、まちの空気感が違います。自分が作家活動をしていなくても、そういう人たちの存在が可視化されるだけで、そのまちの息づかいが決定的に違ってくると思います。

良いまちには、良い図書館が

——お話を聞いていると、紫波町や甲州市勝沼など、前向きなまちづくりを実践し、その精神が根付いているまちで

は、良い図書館をつくり上げていますね。図書館にはいろいろなポテンシャルがあることも感じます。その一方で、財政難などから、前向きな運営につながっていない例もあるように思います。



猪谷 それを変えていくには首長や議員、行政職員の意識を変えることも大切ですが、住民の皆さんとつながっている図書館であることも重要な要素だと思います。例えば伊万里市民図書館は、市民が主役の図書館づくりを実践してきました。人口5万人くらいのまちですが、常に400人ほどのボランティアの人たちがいて、図書館運営を支えています。

以前、講演に呼んでいただいた北海道の北広島市図書館もボランティアの皆さんの力が大きく、図書館との連携が素晴らしいと思いました。

良い図書館があるまちは、良いまちだと感じています。当然、司書の皆さんはそのことをよくご存じだと思いますが、周りにいる住民の皆さんにもそこに気付いていただけるような努力は必要です。もっと図書館の役割を知っていただくべきですし、それをもっと図書館側から発信していくべきだと思います。

先ほどお話した東日本大震災の被災地で、早々に仮開館した図書館は、普段から住民に愛されていたところが多くありました。日常的に住民とつながって、一緒に図書館づくりを応援している人たちがいる地域は強いのです。

2012年に神奈川県立図書館が財政難のあおりを受けて、閲覧、貸出の廃止などを打ち出したことがありました。横浜市には市立図書館が18館あり、二重行政だと批判されたことが背景にあるのですが、図書館の皆さんがバックヤードツアー^{※3}などを開催し、県立図書館の役割や市立図書館との違いを地道に伝えていきました。結果的に、その後、閲覧サービスの継続などが決定し、県立図書館の役割も県民の知の拠点として発展させるという方向に転換されました。

図書館側からどんどん発信して、市民を味方にしていくことが第一歩だと思います。

先ほど鎌倉市図書館のツイッターの話題をお話ししましたが、私は以前から鎌倉市図書館のツイッターをフォローしています。それは、アジ

サイが咲きましたなど、ちょっとした地元の情報が発信されていて、とても心地が良かったからです。SNSなどを活用しながら、普段から図書館と住民の皆さんがつながっていくことは、とても大切だと思います。例えばニューヨークの公共図書館は、インスタ映えする写真を毎日のようにアップしていて、何千件もの「いいね」がついています。あの発信力には感心します。

——SNSの利用など、公立図書館でもお金をかけずにできることがいろいろありそうですね。今日はありがとうございました。

聞き手 (一社) 地域研究工房代表理事
小磯 修二 (こいそ しゅうじ)

PROFILE

猪谷 千香 (いがや ちか)

1971年、東京都生まれ。明治大学大学院博士前期課程考古学専修修了。産経新聞で長野支局、文化部記者などを経て、ニコニコ動画やハフィントンポスト日本版などインターネット上の配信サービスでニュース担当や記者を務める。現在は「弁護士ドットコム」でニュース記者を務めながらジャーナリスト活動が続いている。著書に『つながる図書館—コミュニティの核をめざす試み』(ちくま新書)、『町の未来をこの手でつくる 紫波町オガールプロジェクト』(幻冬舎) など。

取材協力「旅の図書館」

今回のインタビューは、公益財団法人日本交通公社(JTBF)が運営する「旅の図書館」を会場に利用させていただきました。

観光関連の学術誌や観光統計、古書、ガイドブック、機内誌など、観光の研究と実務に役立つ図書を取りそろえている専門図書館です。館内での閲覧のみですが誰でも利用でき、観光関係者が学びながら交流できる「たびとしょCafe」も年4回程度開催しています。東京にお出かけの際には、ぜひご活用ください。



〒東京都港区南青山2丁目7-29日本交通公社ビル
開 10:30~17:00 休 土・日曜日、祝日、第4水曜、年末年始など。詳細は <https://www.jtb.or.jp/library/> を。

※3 バックヤードツアー

普段は関係者しか入ることができない施設や舞台などの裏側を見学してもらう催しのこと。

データで探る 北海道の 公立図書館



ここでは、北海道の公立図書館について、公表されている統計データとアンケート調査から、その特徴を探っていきます。

2008年3月号の本誌でも、「データで探る北海道の公立図書館」と題し、公表データと釧路公立大学地域経済研究センターが実施した公立図書館へのアンケート調査の分析結果を紹介しました。そこで、改めて道内の公立図書館の現状とこの10年間の変化について、昨年末に（一社）地域研究工房（代表理事 小磯修二）が実施した「公立図書館の運営について」のアンケートの速報結果も踏まえて紹介していきます。

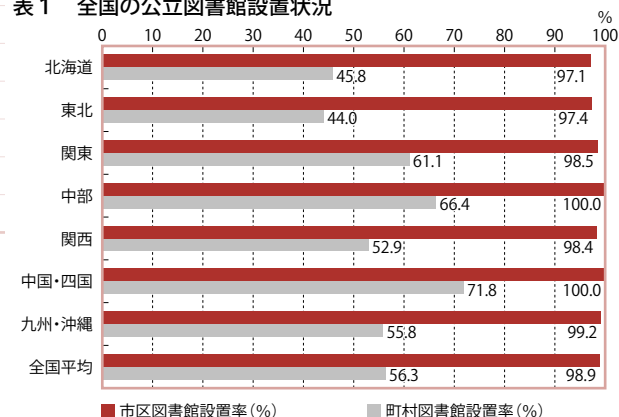
いぜん低い設置率と大きい地域間の格差

（公財）日本図書館協会発行の『日本の図書館 統計と名簿2017』から、全国の市町村立図書館設置率を算出したものが表1です。前回も『図書館年報2007』から同様のデータを紹介していますが、設置率の傾向に大きな変化はありませんでした。

北海道では夕張市の図書館が図書コーナーとなったことから市立図書館の設置率は、100%から97.1%に減少していますが、町村図書館は中富良野町図書館が2014年に開設し、設置率は44.8%から45.8%に伸びています。道内では、今後も図書館の開設を検討しているまちが見られていることから、設置率は高まっていくことが想定されます。しかし、北海道の町村図書館の設置率は5割を切っており、全国的にみると低い状況が続いています。

また、道内を6地区に分けて町村図書館の設置率を比べる（表2）と「道北」や「道央」で低く、一方で

表1 全国の公立図書館設置状況



※『日本の図書館 統計と名簿2017』より算出、図書館数・自治体数は2017年4月1日現在
 （東北：青森・岩手・宮城・秋田・山形・福島 関東：茨城・栃木・群馬・埼玉・千葉・東京・神奈川 中部：新潟・富山・石川・福井・山梨・長野・岐阜・静岡・愛知 関西：三重・滋賀・京都・大阪・兵庫・奈良・和歌山 中国・四国：鳥取・島根・岡山・広島・山口・徳島・香川・愛媛・高知 九州・沖縄：福岡・佐賀・長崎・熊本・大分・宮崎・鹿児島・沖縄）

「オホーツク」や「十勝」では高くなっています。道北は留萌、道央は後志がいずれも公立図書館の設置率が1割程度となっており、最も設置率の高い網走の9割とは大きな差がある状況です。

増加する人口当たり蔵書冊数と貸出数

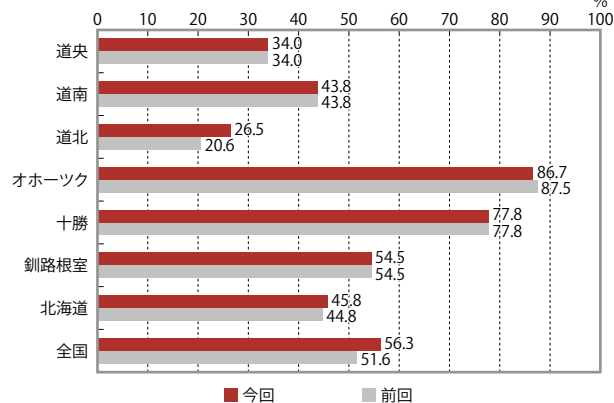
次に、蔵書冊数の変化を見ていきましょう（表3）。人口100人当たりの蔵書冊数は全国7地区でいずれも前回より増えています。「中国・四国」や「東北」、「九州・沖縄」では前回の1.3倍を超える冊数となり、中でも「中国・四国」は全国7地区で人口100人当たりの冊数は411.1冊とトップになっています。人口減少の影響が考えられますが、2008年3月号で取材した鳥取県立図書館など、「中国・四国」での活発な図書館活動や積極的な運営が広く波及しているとも考えられます。一方、北海道の6地区での人口100人当たりの蔵書冊数（表4）は、「道北」が1.4倍と最も伸び率が高く、他の地区も「道央」を除いていずれも前回の1.3倍を超える伸び率となっていました。

人口100人当たりの貸出状況（表5）は、全国7地区でいずれも伸びています。前回に比べて最も伸び率が高いのは、やはり「中国・四国」でした。北海道では（表6）「道南」で最も貸出が伸びており、「釧路根室」では減少傾向がみられました。

デジタル化の着手は2割強

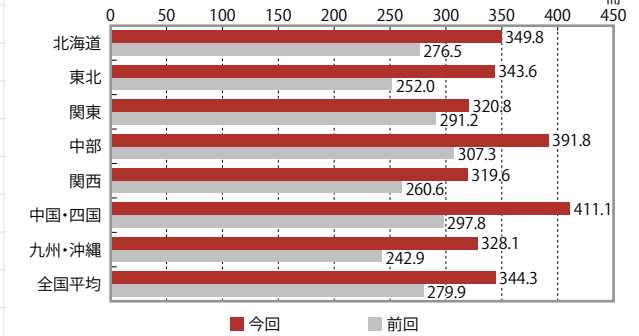
ここからは、2018年11月～2019年1月にかけて（一社）地域研究工房が実施した「公立図書館の運営につ

表2 北海道の町村図書館の設置率



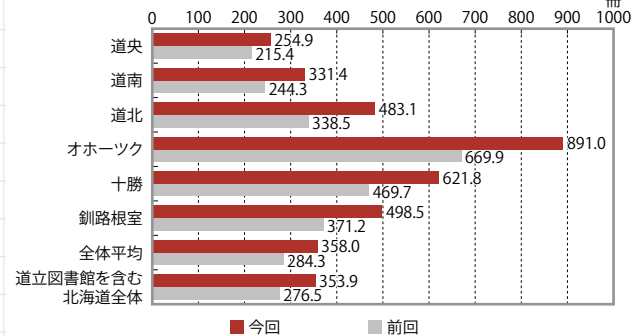
※今回：『日本の図書館 統計と名簿2017』より算出。図書館数は2017年1月1日現在
 ※前回：『日本の図書館 統計と名簿2006』より算出。図書館数は2006年4月1日現在
 (道央：空知総合振興局、石狩振興局、後志総合振興局、胆振総合振興局、日高振興局 道南：渡島総合振興局、松山振興局 道北：上川総合振興局、留萌振興局、宗谷総合振興局 オホーツク：オホーツク総合振興局 十勝：十勝総合振興局 釧路根室：釧路総合振興局、根室振興局、なお幌延町と幌加内町は旧支庁時代のエリアで算出)

表3 人口100人当たりの蔵書冊数（全国）



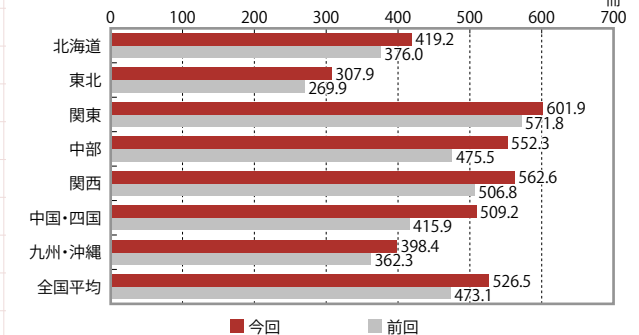
※今回：『日本の図書館 統計と名簿2017』より算出。人口は2016年1月1日現在の総人口
 ※前回：『日本の図書館 統計と名簿2007』より算出。人口は2005年3月31日現在の総人口

表4 人口100人当たりの蔵書冊数（北海道）



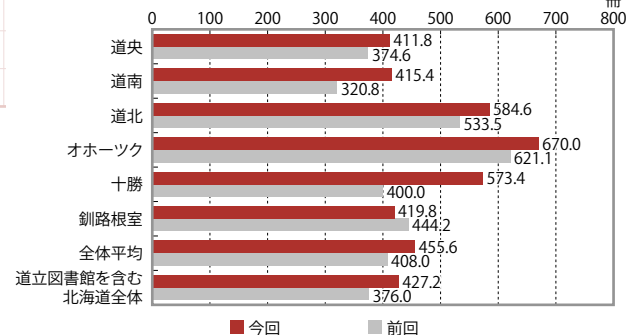
※今回：蔵書冊数は2017年3月31日現在。人口は2018年1月の住民基本台帳を用いて設置市町村のみで集計
 ※前回：蔵書冊数は2006年3月31日現在。人口は2006年6月の住民基本台帳を用いて設置市町村のみで集計

表5 人口100人当たりの貸出状況（全国）



※今回：貸出冊数は2016年度実績。人口は2016年1月1日現在の総人口
 ※前回：貸出冊数は2006年3月31日現在。人口は2005年3月31日現在の総人口

表6 人口100人当たりの貸出状況（北海道）



※今回：貸出数は個人貸出数（2016年度実績）。人口は2018年1月の住民基本台帳を用いて設置市町村のみで集計。北海道全体は総人口より算出
 ※前回：貸出数は2006年4月1日現在。人口は2006年6月の住民基本台帳を用いて設置市町村のみで集計。北海道全体は総人口より算出

いて」のアンケート調査の速報結果をもとに、市町村図書館の実態や変化を紹介していきます。このアンケート調査は2007年末に釧路公立大学地域経済研究センターが実施したアンケート「これからの時代の公立図書館に向けて」を参考に、その後の変化を探るため、同じ設問と新たな設問を盛り込んで実施したものです。

調査対象は『日本の図書館 統計と名簿2017』に記載されている公共図書館名簿の市町村立図書館119館（分館は除く。ただし、館長が別の場合は対象とする）で、郵送で調査票を送付し、104館から回答を得ました（回収率87.4%）。

課題解決型の図書館を目指していくためにはレファレンスサービスの充実が大切です。「今後のレファレンスサービスについて、どのように対応していくべきだと感じていますか？」（表7）の設問では、「より充実させていくべき」が44.2%、「今よりは多少充実させていくべき」が33.7%、この2つの合計は77.9%となりました。前回の調査では59.3%、22.1%、合わせて81.4%で、大きな変化はありませんでした。一方で、今回の「現状維持」が微増している結果からは、充実させたい思いはあるものの、対応できる職員数やスキルアップなど課題がある中での微妙な思いが表れているように思います。

今回のアンケート調査では新たにデジタル化についての設問を盛り込みました。「所蔵図書や資料のデジタル化は進めていますか？」（表8）の設問では、24.0%が「進めている」と回答したものの、「進めておらず、今後進める予定はない」と回答した割合は31.7%でした。予算確保の難しさや対応できる職員がいらないなどの課題があるようです。また、デジタル化を進めている、あるいは進めたいと思っている、今後進めていく予定と回答した図書館に、デジタル化の対象範囲を聞いたところ（表9）、「地元に残っている歴史的資料」が84.3%、「地元に残るアナログ形式の録音や映像資料」が35.3%となりました。地域独自の資料はデジタル化して長く残しておきたいという気持ちが伝わってきます。

期待される学校図書館との連携強化

「図書館における児童や青少年サービスでは、どのようなことを行っていますか？」の設問（表10）では、前回に比べて「テーマ展示」や「地域の学校との連携」「授業等への講師派遣」「関連団体との連携」などの割合がやや高くなっており、学校や地域の団体とのつながりを生かした読書推進活動が図られているようです。一方で、「自動車等による移動図書館の導入」は減少傾向にありました。

「他の図書館との連携・協力について、今後どの図書館との強化を最も望みますか？」の設問（表11）では、「学校図書館との連携・協力強化」が35.6%となり、前回の23.3%を大きく上回りました。学校図書館法では、1997年の改正で2003年4月1日以降は12学級以上の学校には必ず司書教諭を、2014年の改正で学校司書を置くように努めなければならないことになっています。しかし、道内では司書不在の学校図書館もあり、学校側からの協力ニーズが高まっているものと推察されます。

「今後、貴館では、特にどのような分野をより充実させていきたいと考えておられますか？」の設問（表12）では、「学校教育支援」65.4%、「子育て支援」61.5%、「地域情報支援」39.4%という順になりました。前回調査と比較すると「医療・健康支援」や「福祉関連支援」の割合が伸びており、高齢化社会への対応を意識していることがうかがえます。一方で、選択肢を3つまでに限定した

表7 今後レファレンスサービスについて、どのように対応していくべきだと感じていますか？

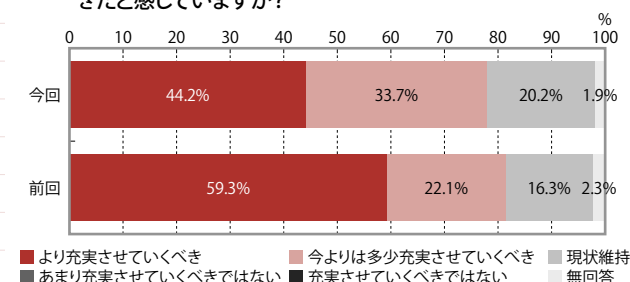
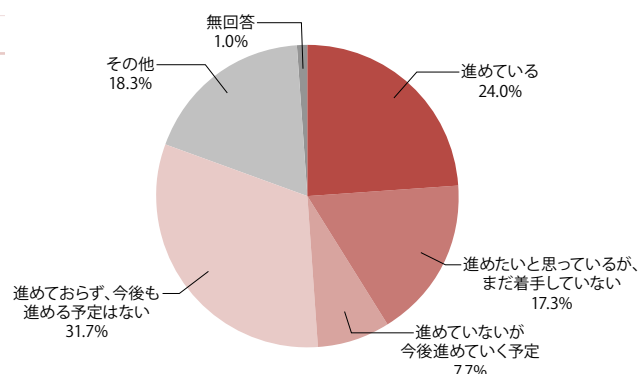


表8 所蔵図書や資料のデジタル化は進めていますか？



こともあり、前回に比べて「行政支援」と「地域情報支援」については割合が下がっています。地域情報はまちの歴史や文化を残していくためにも重要な要素です。また、少子高齢化、人口減少、グローバル化など、課題が山積する中で、知の拠点である図書館は行政を支える大きな力になるはずです。これらの分野の支援にも前向きに取り組んでほしいと思います。

直営の割合が高い北海道

(公財)日本図書館協会の調査によると、2016年度までに指定管理者を導入した市区町村図書館は全国で530館、これを2016年の市区町村図書館総数で割ると指定管理者の導入率は16.5%になっています。今回のアンケート結果では、指定管理者制度を導入している図書館は11.5%でした。

地方自治体の財政環境が厳しさを増す中で、指定管理者制度を導入する公立図書館が少しずつ増えていますが、北海道においては9割近い図書館で自治体が直接図書館を運営している実態があります。多くの自治体が、より重要な行政サービスとして位置付けているようです。

この10年間の図書館をめぐる状況で最も大きな変化の一つは、指定管理者制度の導入でしょう。先駆けとなった佐賀県たけあしの武雄市図書館においては、賛否両論が巻き起こりましたが、その議論の契機は公的な図書館の使命を営利目的の企業が、果たすことができるのかという問いかけでした。しかし、削減される予算、職員数の中で、高まる利用者のニーズを民間の柔軟な発想と仕組みで受け止めていく流れを否定することができないことも事実です。

利用者の幅広いニーズに応えながら、地域の図書館としての役割を発揮し、その魅力を高めていくためには、官か民かという対立軸の思考ではなく、知の拠点である図書館を地域全体で支えていく意識を持つことが大切でしょう。実証的なデータに支えられた科学的な議論を積み上げながら、地域に根付いた図書館づくりの議論が盛り上がっていくことを期待しています。

表9 デジタル化を進めている(あるいは進めたいと考えている)対象範囲をお聞かせください

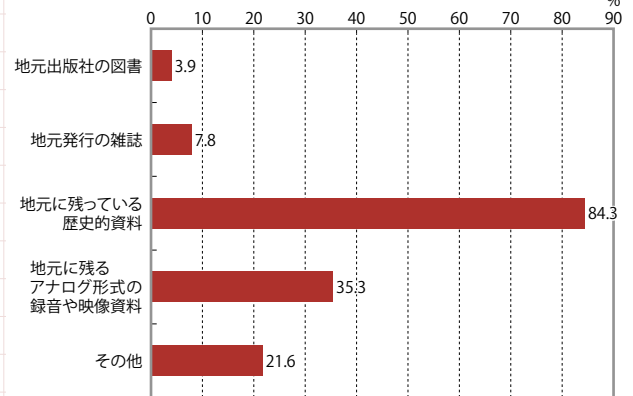


表10 図書館における児童や青少年サービスでは、どのようなことを行っていますか？

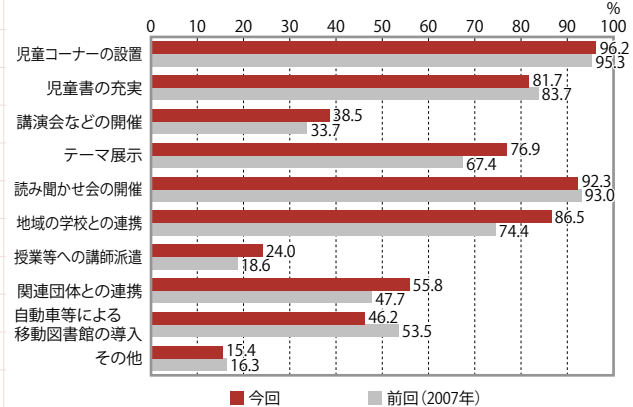


表11 他の図書館との連携・協力について、今後どの図書館との強化を最も望みますか？

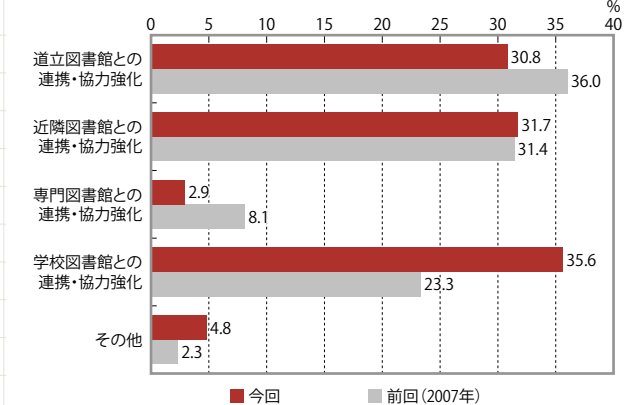
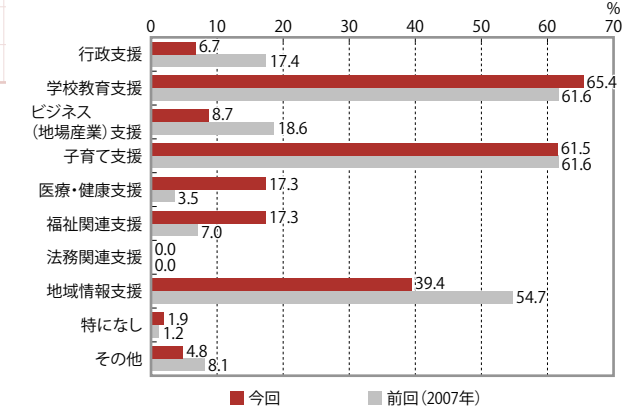


表12 今後、貴館では、特にどのような分野をより充実させていきたいと考えておられますか？



個性あふれる 図書館づくり

～札幌市の新しい図書館～



道都として発展を続ける札幌市。近年、札幌市にはターゲットを明確にした、個性あふれる図書館が誕生しています。2016年11月に開館した「札幌市えほん図書館」と、2018年10月に開館した「札幌市図書・情報館」に行ってきました。

声を出して本を読めるえほん図書館



白石区複合庁舎 6 階にあるえほん図書館

2016年11月に新しくできた白石区複合庁舎の6階に開館した「札幌市えほん図書館」(以下、えほん図書館)。ターゲットを未就学児に絞り、乳幼児の読書のきっかけづくり

を創出する、絵本に特化した図書館です。

札幌市では平成17年に「札幌市子どもの読書活動推進計画」を策定し、子どもが自主的に読書を楽しむ環境づくりや図書館サービスの充実を図ってきました。しかし、その中で課題も浮き彫りになっていました。例えば、静寂性を求める図書館の壁です。小さな子ども連れて図書館に行っても周囲の人たちに遠慮しながら本を読んだり、探したりしなければいけません。また、予算面でもこれまでの図書館では幅広い市民を対象にしたサービスを提供しなければならないため、子ども

向けの図書購入費に制限があります。サービス面でも子どもを専門としたスタッフの研修や知識の習得にさける時間は多くありません。

札幌市の姉妹都市である韓国^{テジョン}の大田広域市では、庁舎内に子ども図書館があり、そこを札幌市の訪問団が視察したことは、えほん図書館開館に向けて大きな弾みになりました。大田広域市が行政庁舎に子ども図書館を入館させた背景には、単に教育のためだけでなく、子どものころから庁舎を訪問する機会をつくり、行政に親しんでもらうという狙いもあったそうです。また、白石区役所移転に当たっては、地元から庁舎内ににぎわいのある空間を望む声があり、こうした結果を踏まえてえほん図書館の開設に踏み切ったのです。

えほん図書館の最大の特徴は、保護者が声を出して読み聞かせをしたり、子どもたちが声を出して本を読んでも構わないということ。未就学児を対象にしているので、これまでのような静寂性を求める図書館とは一線を画し、保護者と子どもたちのニーズや利用しやすさを第一に考えた結果です。



乳児を寝かせながら本が選べる赤ちゃん向けの本がそろうコーナー



奥にある広々としたカーペット敷きのスペースは読み聞かせコーナーとして活用



遊びながら絵本を楽しめる布の絵本は、市内にある公益財団法人ふきのとう文庫の手作りの絵本を購入



カーペット敷きの遊べるスペースの横にはソファを配置

書棚に沿ってカーペットが敷いてあるコーナーは乳児向けの絵本がそろい、保護者が子どもを寝かせたまま本を探せるようになっています。奥にもカーペットを敷いたコーナーがあり、紙芝居やバリアフリー絵本として布の絵本や手話付き絵本、拡大写本（大きな字の絵本）が並んでいます。その横にはおもちゃで遊べるコーナーやソファも配置しており、親子でくつろげるエリアが設けられています。

また、子どもが自ら本を選べるように低い書棚を採用し、表紙が見えるように本を配置しています。中でも通称「ジャ



めくりながら本を選べるジャケット架

ケット架」と呼ばれているカラフルな可動式の絵本箱は、レコード店でジャケットをめくって選ぶ「ジャケット買い」のように、絵本をめくりながら選ぶ楽しみを演出しています。

蔵書管理ではICタグを導入し、自動貸出機を2台

設置。操作が簡単のため、子どもたちが自分で操作をする姿も見受けられ、貸出の約6割が自動貸出機の利用によるものです。これは待ち時間の解消とスタッフの省力化にもつながっています。



絵本にICタグが装着されているので、置くだけで貸出手続きができる自動貸出機

期待されるデジタル化対応とプログラミング事業

えほん図書館のもう一つの役割が、子どもたちの読書活動をサポートする人たちを支援することです。そのため館内には「おひさまのへや」と名付けられた体験型活動室に隣接して「おつきさまのへや」を設置し、ボランティアなどの活動室として利用しています。

これらの部屋を活用して精力的に行っているのが、おはなし会やワークショップ、各種講座などの事業です。

毎週水曜日は登録ボランティアによるおはなし会を開催。また、えほん図書館の司書が担当するおはなし会は毎週木曜日に0歳、火曜日に1、2歳、毎月第4土曜日に3歳以上と、年齢別に開催しています。毎月第2日曜日に実施している「図書館デビュー」は、図書館に初めてやってくる子どもたちを対象に、音楽演奏や演劇などを交えたエンターテインメントあふれる読み聞かせで好評を博しています。このほか、図書館入り口前のガラス面でのお絵描きワークショップやしかけ絵本ワークショップなど、体験しながら楽しめる事業ワークショップを展開しています。また、絵本講座として絵本編集者や絵本作家を招いた大人向けの行事も行っています。

中でも特徴的なのが、デジタル絵本ワークショップ

(絵本をテーマにデジタル機器を活用した体験型ワークショップ)といったICT時代に対応した事業です。2020年に小学校でプログラミング教育が必修化されることもあり、小さなころから気軽に絵本をテーマにデジタル機器やプログラミングに触れる機会を創出しています。2018年11月には、各種体験ブースを回ってもらう「プログラミングまつり」を開催しましたが、親子で400人以上が詰めかけ、大盛況になりました。

また、2019年1月20日には「デジタル絵本づくり」が開催され、子どもたちがデジタル絵本創作アプリ「ピッケのつくるえほん」をタブレットで操作して、オリジナルの絵本づくりを楽しみました。プログラミングを含むデジタル関連の体験型ワークショップは需要が高く、今後の展開に期待が高まります。



2019年1月20日開催されたデジタル絵本づくり。タブレットを駆使してオリジナル絵本づくりを体験した

2017年度のえほん図書館の来館者数は約18万7千人。来館者からは「子どもが絵本を楽しめるようになった」「遊べる場所や声を出しやすい空間がとても利用しやすい」「子どもを連れて図書館に出かける機会が増えた」などの声が聞かれ、来館者アンケートによると9割以上が満足感を示しています。「静寂性を求めなかったことで、子どもを連れて図書館に行きやすくなったことが、えほん図書館の一つの成果だと思いま

す。お互いに迷惑がかからないように意識して利用していただいています」と池田章宏館長は言います。

市内中心部の好立地を生かした図書・情報館

「はたらくをらくにする。働くことは素敵なことです。いろいろな人に会えたり、新しいことを覚えたり、そのうえ、お金ももらえるのですから。とはいえ、本当に私にできるんだろうかと不安になったり、家族に心配ごとがあったりもしますよね。そんなとき、支えになりたいと私たちは考えています。『はたらくをらくにする』。それを私たちは目指しています」



2階に掲げられた図書・情報館のコンセプト

札幌市図書・情報館(以下、図書・情報館)の2階の入り口を入ると、こんな言葉が飛び込んできます。これがまさしく図書・情報館のコンセプト。働く人たちをターゲットの中心に据えて、図書をはじめ必要な情報を提供する新しい図書館です。

図書・情報館は、札幌市中央区北1条西1丁目に竣工した「さっぽろ創世スクエア」の1、2階にあります。この建物にはオフィスのほか、札幌文化芸術劇場^{ヒタル}、札幌文化芸術交流センター^{スカーツ}SCARTSなどが入居しており、札幌の新たなまちづくりをリードするプロジェクトの一環で誕生しました。

館内は「WORK(仕事)」と「LIFE(暮らし)」、そしてさっぽろ創世スクエアの文化施設との関連性を踏

まえて「ART（アート）」という3つのテーマで図書を収集し、情報を発信しています。

札幌・北海道の魅力を発信する役目も

1階は300㎡という広さの制約もあり、図書を1,000冊程度に抑え、セミナーも開催できる開放的な空間です。また、市外の観光客やビジネス客の来館も見込んで、札幌や北海道の魅力を発信する場としての機能を盛り込んでいます。札幌や北海道の図書や雑誌が配架されているほか、壁には150インチを超える大型デジタルサイネージ「SAPPORO WINDOW」が配置され、札幌・北海道の魅力を伝える映像を発信しています。

中でも興味深いのが、札幌市のオープンデータを活用して映像化した「SAPPORO KNOWLEDGE TREE」。市内の図書館の貸出データなどを活用したアート作品に仕上がっていて、図書館ならではのコンテンツです。

また、隣接スペースにはカフェや札幌文化芸術交流センターのオープンなイベントスペース（SCARTSコート）があります。図書をカフェに持ち込んで読書ができるほか、SCARTSコートを活用したイベント開催に



広々とした1階。奥の壁にあるのが大型デジタルサイネージ「SAPPORO WINDOW」

合わせて館内展示を行うなど、周囲の施設と連携しながら、札幌の新しい街の顔としての期待が寄せられています。

ビジネスを情報面から支援

図書の多くが配架されているのが2階です。1階の3倍の広さがありますが、スペースを有効活用するために三角形の空間をうまく配置しています。

仕事や働くことに関するさまざまな図書、専門的な資料も収集し、働く人たちを情報面からサポートすることは、図書・情報館の一つの大きな狙いです。

入り口を進むと目に飛び込んでくるのが、「リサーチカウンター」です。ここは、司書2名が常駐し、情報を探すサポートをしてくれる、いわゆるレファレンスカウンターです。業界動向や著作権に関する判例など、専門的な情報を探すことにも対応してくれる、心強い存在です。また、リサーチカウンターの奥にあるデータベース検索エリアには10台のパソコンが配置され、新聞や辞典、雑誌や論文、自治体法務、官報、経営情報や企業情報、マーケティングなど、通常は有料でなければ利用できないデータベースも網羅しています。



さまざまな資料探しに対応してくれるリサーチカウンター

リサーチカウンターの奥が「WORK」エリア。図書・情報館では日本十進分類法にこだわらずに本を配置していて、ここには起業や企業・経営情報、資格やスキルアップ、ビジネス書などが置かれています。また、「会話が弾むコツ」などコミュニケーションに関連した図書

も並んでいます。これには開館前に周囲1.5kmで実施したアンケートの結果が生かされています。ビジネス実務のジャンルで希望する本の回答が多かったのが、ビジネスマナーや職場の人間関係などに関する図書だったのです。働くことの中でコミュニケーションが大きな要素になっていることを痛感し、あえてこのエリアに配置したそうです。また、新聞は業界の専門紙を含めて90紙もそろっています。中には「全国きのこ新聞」など、こんな専門紙もあるのかと驚くような新聞もあります。



90紙がそろった新聞コーナー

図書・情報館を利用した札幌市で自営業を営む男性は「難しい仕事を依頼されて悩んでいたとき、リサーチカウンターのスタッフに相談したら、経済雑誌の検索で参考になる記事を探し出してくれた。本当に助かった」と言います。

図書・情報館の大きな特徴は、最新の情報を伝えるためにあえて貸し出しをしないこと。新刊は予約が殺到し、多くの人が閲覧できる機会が少ないという経験から、館内のみで閲覧してもらう仕組みにしたのです。

また、2階には予約できる座席やミーティングルーム、複数人で仕事の打ち合わせができるグループエリアがあります。打ち合わせをしながら調べ物ができた

り、エリアによっては会話ができるなど、これまで市内の図書館にはなかった新しい利用形態になっていて、図書館のイメージを変えていくことになりそうです。

ICT活用で、図書館のアウトプットを増やす

館内には「WORK」のほか、医療・健康、法律、福祉、介護などの本が並ぶ「LIFE」、写真集やデザイン、音楽、映像などの本をそろえた「ART」のエリアがあります。

書棚を見ていくと、ところどころに赤い縁でくくられた枠があります。これは通称“ハコニワ”と呼ばれているコーナーです。「お金をもらうためだけに働けない私たち」など、あるテーマから広がる読書の世界を提案しているもので、書棚の1コーナーを企画展やフェアのように構成しています。

「今まではインプットに注力してきましたが、これからの図書館に必要なことはアウトプットだと思っています。この“ハコニワ”もそうですが、書棚を自分たちが編集するという思いで一人の司書が一つの棚を担当しています」と言うのは、図書・情報館館長の浅野隆夫さん。蔵書や座席の管理などはできるだけICT（情報通信技術）を導入し、そこで省力化された時間を選書や“ハコニワ”づくりなど、司書的能力を生かして、



書棚の1枠を赤枠でくくった“ハコニワ”コーナー

図書館の発信力を強化していくために確保しているのです。

「ビジネスで大切なことは情報交換。ここはその交流拠点です。交流は会議室でもできますが、そこに図書館の力が加わると、より豊かで深いものになっていくはず」と、知の拠点である図書館をビジネスでもっと活用してもらい、札幌市の産業発展につなげていくという狙いが感じられます。

札幌市電子図書館の蓄積

えほん図書館や図書・情報館の開館以前にも札幌市では先進的な取り組みをしていました。それが「札幌市電子図書館」（以下、電子図書館）です。

札幌市中央図書館が中心になって、2011年度に電子図書館の実証実験を行い、電子書籍を読む端末機器のニーズ調査、市内の出版社の協力を得て商用出版物の電子化、地域資料などの電子化を進めました。翌2012年度には本格実施を想定してシステムの開発仕様やコンテンツ調達策などを検討し、2013年度には図書館の電算システムの再構築を行っています。

そして2014年春には札幌市中央図書館の1階に「デジタル本の森」コーナーを設置し、館内に限って電子書籍を公開、秋からは電子書籍の貸出サービスを開始しました。事前に貸出券を作り、市内の図書館で仮パスワードを発行してもらい、メールアドレスなどを登録すれば、「札幌市電子図書館」のサイトから貸出手続きをするだけでデジタル絵本や小説、雑誌、「広報さっぽろ」や郷土資料など約8,000冊をパソコンやスマートフォンで閲覧できるようになっています。

札幌市の電子図書館はデジタル化に対応する図書館の取り組みとして全国的に注目されました。それを手がけたのが浅野さんでした。「以前から図書館は、無料貸本屋と批判され、出版社や書店と距離ができて

いました。でも、みんな本に関わっている人たちです。また、紙から電子に媒体が変化していく中で、図書館がそこに対応していく必要があると思いました」と当時を振り返ります。その経験は、図書・情報館での積極的なICTの導入につながっていきます。

また、電子図書館での蓄積は、えほん図書館の運営にも生かされています。2011年度の実証実験では、中西出版(株)や(株)亜細亜西社など、札幌市内の16出版社が200冊の書籍を提供し、これを図書館が電子化して実験に利用しました。2012年度には出版社とともに契約ルールの検討や課題などを検討しています。そして、2013年度には北海道や札幌に関する電子書籍の一元的な調達窓口として、一般社団法人北海道デジタル出版推進協会（通称HOPPA、代表理事林下英二）が設立されています。出版社と図書館が連携して電子書籍の普及や周知に取り組むことができるようになったほか、図書館と協力しながら地域に埋もれている良質なコンテンツの発掘を目指した活動を進めています。このつながりが、えほん図書館のプログラミング体験やデジタル絵本づくりの事業に結び付いているのです。

電子図書館をはじめ、えほん図書館、図書・情報館など個性的な図書館づくりは、人口190万人超の札幌市だからこそできる取り組みです。札幌市の魅力の一つに、発信力ある図書館の存在が加わったといえるでしょう。また、これらの図書館の活動によって得られる経験には、道内のほかのまちの図書館に生かすことができる貴重な知見が詰まっているはずです。新しい時代の要請に、地域の図書館が応えていく先導的な役割を担っていくことが期待されます。



連携と情報発信で、 まちを笑顔に

～移転を機に“つながる”図書館を実践する滝川市立図書館～

2018年12月25日。取材でお邪魔した「滝川市立図書館」のカウンターでは、赤と白のサンタクロースの帽子をかぶったスタッフが迎えてくれました。クリスマスに合わせたちょっとした演出が、市民の心を豊かにしてくれます。そこに行くと、何か楽しいコトやモノ、情報がある。だから、ちょっと寄り道していこう…。そんな気にさせてくれる図書館です。

2011年11月に滝川市役所 2 階に移転し、丁寧な連携事業と細やかな情報発信を実践している、滝川市立図書館を紹介します。

移転を機に、必要なサービスを再構築

滝川市は人口約 4 万人。中空知エリアの10市町の中で、中心的な役割を果たしている都市です。30年ほど前から、スカイスポーツの振興や国際交流に取り組み、近年は菜の花畑やクラフトビールでも知られ、田園都市としての観光資源も蓄積されてきました。

滝川市では1962年に児童会館に図書室が設置され、1973年に滝川市文化センターに隣接して待望の「滝川市立図書館」が開館しました。しかし、2000年代に入って図書館の老朽化が目立つようになり、耐震強度やエレベーターがないなど、多くの市民が利用するには、時代にそぐわない建物の構造にも懸念が出てくるようになりました。また、当時の図書館は空知川の堤防沿いにあり、バス停留所がなく交通アクセスの不便さも指摘されていました。

しかし、改築するには多額の費用が見込まれます。そこで、既存の施設への移転が検討され、最終的に滝川市役所に移転することが決定しました。

既に竣工している市役所庁舎に図書館を移転することは、全国的にも珍しいことでした。市役所竣工時に図書館が入館する予定はなく、スペースの確保、書架を含めた重量制限など、いくつか突破しなければならぬ壁はありましたが、2階にあった税務課などを3階に、3、4階にあった部署を調整し、2階のスペースを確保することができました。

そもそも市役所は市民が訪れる機会があり、滝川市の場合にはすぐそばに市立病院があるため、ついでに立ち寄ってもらうことができます。不要なランニングコストがかからない、行政内の他の部署との近さなど、メリットも多く、市役所はベストな選択でした。

一方で、閲覧室に配架できる蔵書は6万冊まで、吹き抜けがあるため1階の音や人の声が聞こえるなど、運営上の制約もありましたが、結果的に必要なサービスを見直すことにつながっていきます。

「移転に当たって、旧館時代の取り組みにこだわらず、どんなサービスがあれば喜んでもらえるかをゼロから



2019年のNHK大河ドラマ『いだてん』に合わせて関連書籍を並べた展示の前で、木村館長（右）と司書の深村さん

考え直しました。必要なサービスは残しながら、新たなサービスを積み上げていくことになりました」と、滝川市立図書館で30年近く司書ひと筋に取り組んできた深村清美さんは言います。

館内に入ると、市民の関心の高い健康や医療の書籍が並ぶ「いのちの森」コーナーが目飛び込んできます。「従来の日本十進分類法にこだわらず、利用者目線で本が探しやすいようにテーマ別に並べています」と深村さん。その先には実用本が並ぶ「くらしの森」



大人向けの「文学の森」コーナーは、「えほんの森」コーナーから一番離れた位置に配置

コーナー、さらに奥には小中学生向けの企画展示、その横に乳幼児向けの「えほんの森」と、お母さんと子どもが近くで本を選べるように配慮しています。旧館時代、子ども向けの本とお母さんが読みたい本が別フロアに配架されていたことから「親子で一緒に安心して本を選んでもらいたい」という思いを実行したのです。

図書館を“市民と行政をつなぐツール”に

図書館が市役所に移転し、行政各部との距離が近くなったことで行政との連携も始まりました。「公共施設の中で、図書館は最も敷居の低い施設。集客力が高く、誰でも来館できます。そこで、図書館を市民と行政をつなぐツールとして使っていただこうと考えました」と木村純館長は言います。

例えば、図書館前のロビーには行政情報コーナーが設けられ、暮らしの困りごとや福祉、学校や仕事など、自由に持ち帰ることができるパンフレットやチラシが

配置されています。また、入り口には「水道事業ビジョン(案)」が設置されていて、その場でパブリックコメントが提出できるよ

うになっていました。館内の壁などを利用し、市役所各部からのお知らせやポスターも貼られています。

市が主催するイベントがあれば関連書籍だけでなく、展示できる実物などを一緒に展示する「連携展示」を企画。2018年3月に観光国際課と北海道空知総合振興局が主催した講話会と料理教室の際には、講師の佐々木十美さんが監修した料理本のほか、空知管内の食材や加工品を展示し、市民の関心を高めました。

当初、市役所内の情報収集は、PR用のチラシを配布し、各部から情報提供してもらう想定でした。しかし、情報量が少なかったこともあり、図書館スタッフが情報をキャッチした時点で、「勝手にコラボ」と称して図書館側から展示案を提示し、関連する展示物を借用していくようになりました。図書館からの働きかけが市役所内部に広がり、関連する団体や組織とのつながりも生まれています。

また、健康診断や講座では図書館が関連本を持ち込み、イベントでは「出張おはなし会」にも対応しています。司書をはじめ館長自ら図書館を飛び出し、要請



図書館入り口に配置したパブリックコメントのコーナー。奥に貼ってあるすごろくは図書館スタッフの手作り。このすごろくは希望者に配布



管内の食材なども一緒に展示したスーパー管理栄養士の佐々木十美さんの講話会の展示

があれば、どこにでも出向いていく覚悟です。春に開催される恒例の「たきかわ菜の花まつり」では、開催1カ月前から菜の花の関連本やマップ、地元の菜種油の商品サンプルなどを展示するだけでなく、菜の花が見ごろの時期には、図書館スタッフが菜の花Tシャツを着用してPR活動に参加するなど、行政活動を支援しながら図書館の情報発信にも努めています。

地域の中で、さまざまな人や企業、団体と一緒に

滝川市立図書館の移転では、社会資本整備総合交付金を活用したこともあり、滝川駅や市役所を含む中心市街地のにぎわい創出という命題もありました。そこで、移転に当たっては、滝川商工会議所を通じて滝川市商店街振興組合連合会に図書館移設連携実行委員会の設置を依頼し、まちなかにおける連携のすがたを探っていきました。その中で浮き上がってきたことの一つが、情報発信です。



ロビーの「まちなか情報コーナー」

滝川市立図書館には、滝川市の店や工房、サークルや団体、イベント、そして人の情報が溢れています。例えば、ロビーの壁の「まちなか情報コーナー」には、ポスターやチラシを掲示。驚くのは、図書館のスタッフが自ら



観光客にも有益な「まちなかコンシェルジュ」。関連書籍も一緒に展示。右はバックナンバーファイル

取材してまとめた「まちなかコンシェルジュ」です。写真をふんだんに盛り込んだ顔が見える情報は、受け取る側に親しみを与えてくれます。過去に取材した情報はすべてファイリングしており、移転から継続して紹介してきた商店や人とのつながりを感じさせてくれます。今年度からは市民が活動しているサークルや団体を紹介、こうした情報を積み重ねることで、これまでの蔵書にはない資料価値が生まれてくるように思います。

また、図書館の活動が評価されていることを実感できるのが、130誌の雑誌が並ぶ「雑誌コーナー」。このうち72誌は「雑誌ささえ隊」と呼ばれるスポンサー制度によって、市内の企業や個人によって寄贈されたもので、雑誌数は旧館時代の5倍以上になっています。雑誌ささえ隊による当初の



「雑誌ささえ隊」から寄贈された雑誌のカバー裏には、スポンサーのチラシを挿入

目標数は30誌。口コミで市民にも広がり、購入後に自分が読んでから寄贈する個人スポンサーもいるそうです。

企業や団体から要請があれば、図書館の活用できる空間を展示スペースとしても提供しています。市内にある北海道新聞の販売店が企画した写真展「甲子園への軌跡」では、19年ぶりに夏の甲子園に出場した滝川西高等学校の奮闘を振り返るパネルを展示。市民の心に刻まれたひとコマを思い出させる、空間になりました。

これらの取り組みで地域の人たちとの信頼関係が築かれ、多彩な業種の人たちと一緒に開催するイベントも生まれてきました。夏休み期間中に市内の寺院との連携で開催された「夏の『こわ〜い』おはなし会&きもだめし」は、本堂での住職やボランティアの読み聞か



好評だった「夏の『こわ〜い』おはなし会&きもだめし」

せとお寺の中をめぐる肝試しを組み合わせたもの。「泣いてしまう子どもたちもいましたが、とても楽しい連携イベントになりました」（木村館長）と、図書館スタッフが楽しみながら企画段階から関わっている様子がうかがえます。

子どもの読書普及活動もつながりを生かして

滝川市立図書館では、旧館時代から子どもの読書普及に積極的に取り組んできました。その蓄積もあり、移転後の2013年度には「子どもの読書活動優秀実践図書館」に選ばれています。

乳幼児の絵本との出会いの場づくり、おはなし会、各種イベント、移転を機に廃止した移動図書館車に代わって保育所や託児所、学童クラブなどの団体や施設に本を貸し出す「まごころ本箱『はこぶっく』」など、多彩な活動を続けています。

市内に10校ある小中学校には、年4回図書館の本を運び入れ、体育館などで平置きにした中から子どもたち自らが本を選んで学級文庫を作ってもらいます。この「図書館学級文庫」は自分で選ぶ参加意識が生まれ、



「図書館学級文庫」の本を選ぶ子どもたち

読書推進につながっているほか、本を介した子どもたち同士のコミュニケーションにも一役買っています。

市内の全小学生に配布されている「読書アルバム」は、100冊まで読んだ本を記入すると表彰されるもので、旧館時代から続いています。2017年度には2,700冊もの本を読破した子が登場するなど、子どもたちにも図書館の努力とその熱意が伝わっているようです。

また、夏休みに合わせて開設する「読書感想文におすすめ!」では、地元資本のフランチャイズ「TSUTAYA 滝川店」と連携し、図書館と同店にそれぞれコーナーを設置し、おすすめ本を紹介しています。図書館にある本は冊数が限られているため、書店での販売促進になったそうで、図書館と書店の有効な関係づくりにつながっています。

夏休みの自由研究向けには、「滝川市美術自然史館」「滝川地区地域防災施設（川の科学館）」「B&G海洋センター」「たきかわスカイミュージアム」と一緒に、「たきかわDE調べる学習体験講座」を実施。子どもたちは、川、空、自然の中から好きなコースを選んで体験しながら学ぶことができます。それぞれの会場に関連する書籍を持ち込み、市内にある多彩な施設と連携しながら、子どもたちの教育を支援しています。

能動的に発信する図書館

これまで紹介してきた滝川市立図書館の取り組みは、ほんの一部でしかありません。選書や蔵書管理、貸出、レファレンスなどの業務に加えて、年間で展示の企画だけで200件以上、館内外でのおはなし会や読み聞かせ会、学校図書館運営支援など、さまざまな仕事をこなしています。

また、コミュニティFM「G'Sky」の番組内で新十津川町図書館と交代で本や行事などを紹介している「小さな図書室」、地元紙「プレス空知」の「絵本deビブ



地域情報サイト「まいぶれ滝川」とのコラボコーナー

リオバトル」の掲載、地域情報サイト「まいぶれ滝川」の「今日は何の日?!」コーナーなど、地元のメディアともコラボレーションし、それ

ぞれの媒体で情報を発信しているほか、館内に関連する本やチラシを常設展示し、相乗効果が生まれるような発信をしています。

「また来てみたい、おもしろかったと思ってもらえるようにいろいろな情報が図書館にある、地域の情報拠点となる図書館を目指しています。旧館時代に比べると市民の皆さんの反応の変化を感じます。あの企画はよかった、あの展示はおもしろかったなど、たくさん声をいただくようになりました。これは大きな進歩です。図書館はお客様の反応を直接肌で感じることができる施設で、職員の励みになっています。図書館の可能性を感じます」と木村館長。

深村さんも「図書館を介して、市民の皆さんに笑顔の連鎖が起きているように感じます。この連鎖を広げていきたい」と、次に離れたまちの図書館との連携の種をまいています。移転に当たって視察をした、交流のある帯広市図書館に展示企画を提案したのです。2017年9～11月に滝川市立図書館が実施して好評だった「BOOKセラピー～あなたを癒やす処方箋～」の展示を紹介し、同じ企画展を帯広市図書館で行ってもらうことになりました。さらに、SNSのフェイスブックで紹介すると、その輪が広がり道内外の26館（2019年2月2日現在）でBOOKセラピーの展示が行われることになり、滝川市立図書館でも1月25日から3月27日まで、第2弾の展示を行っています。

「お互いにアイデアを共有すれば、離れていても図書館同士で一緒にできることがあるのではないかと思います。アイデアや制作物など共有できるものがあれば、積極的に提供しています。協力は惜しみません。全国の図書館の皆さんと一緒に元気や笑顔をつないでいきたい」と思いを語ります。こうした考え方は、図書館職員の負担軽減や新しいアイデアを生み出すことにもつながるでしょう。

印象的なのは、忙しそうなるすべての業務を本当に楽しんで実践していること。話をしているだけで図書館のスタッフがワクワクしながら毎日を過ごしていることが伝わってきて、そこから図書館の可能性が広がっているように感じます。また、これまでの経験と蓄積など、今ある図書館の資源を生かしながら、スタッフの創意工夫で魅力を生み出し、まちづくりや図書館の活性化など、地域の好循環を生み出すことにつながっているといえるでしょう。

もちろん事業のスクラップ&ビルド、選書のバランス、滝川市の図書館としての特色を次の世代に引き継いでいくことなど、今後の課題もあります。これらの課題にもスタッフの積極的な意欲で取り組んでいくことが期待されます。

前田康吉市長は「司書をはじめ図書館のスタッフの自主的なアイデアと実行力によって、市民の応援団の輪が次第に広がっている」と、地域の資源として図書館が市民の中に広く認知されてきている手応えを感じています。

滝川市立図書館の取り組みは、これからも新しい“つながり”を創出し、まちの魅力を増していくように思います。



市民に図書館の応援団の輪が広がっていると話す前田市長

図書館を核にした まちづくりへの挑戦

「地域の力を生かす、幕別町図書館」



幕別町図書館本館

3つの力を図書館づくりに生かす

幕別町は帯広市に隣接するまちで、人口約2万7千人。市街地は帯広市に近い札内地区、役場本庁舎などがある中心部の幕別本町、2006年の合併で編入された忠類地区に分かれていて、それぞれに図書館があります。

ぜひ訪問してもらいたいのが、幕別町図書館のホームページ（<http://mcl.makubetsu.jp/>）です。「今日の一冊」「千本万架 今月の特集本」「北の本箱」など、トップページには本が並んでいるようにデザインされています。そして、本棚がそこにあるような「バーチャル本棚」が掲載されています。これらのコンテンツは図書館の展示にリンクしていて、家庭でも図書館の展示コーナーを実感で



蔵書管理システムの改変を機に、地域とのつながりを深め、より地域に密着した図書館づくりに挑戦しているのが、幕別町図書館です。図書館は町内に本館・札内・忠類の3館がありますが、本館を訪ねて、これまでの取り組み取材しました。



幕別町図書館のホームページ



大人と子どもの間、10代向けの本が並ぶ「はざま文庫」。ホームページ(右)と連動しているほか、高校生のまぶさスタッフが表紙の漫画を描いた本のリスト紹介「はざま通信」を配置



毎月テーマごとに展示する月展示。1月は「真冬の災害」がテーマ。ホームページの「千本万架 今月の特集本」をクリックすると、右のページにリンクしている

きるのです。また、「今日の一冊」は毎日更新され、その日にちなんだ本が紹介されています。

幕別町図書館が図書館の運用を見直すきっかけになったのが、蔵書管理システムの更新です。2014年に幕別町図書館では、全国で初めて「カメレオンコード」を図書館業務に全面的に導入しました。カメレオンコードとは、バーコードやICタグに代わる基盤技術として物流管理などに活用されているものです。カラーバーコードとも呼ばれていて、色の違う正方形のモザイク模様の中に情報を収録して管理をする技術です。これに自治体の文書管理システムの技術をベースに開発された書架の業務支援システムを導入し、書棚単位で

管理ができるようになりました。これによって蔵書管理や窓口業務の大幅な効率化が図られました。

蔵書管理システムを見直す過程の中では、単にシステムを更新するだけでなく、今後の幕別町図書館のあり方についても議論がなされました。当時は図書館のホームページを館長自らが手がけ、斬新だと話題になっていたことから、ホームページによる情報発信の重要性も認識されていました。

そこで、蔵書管理システムの改変を契機に、図書館が地域の核となり、より親しみやすい存在になろうという「図書館改革プロジェクト」が始まります。そこでは、図書館にある本棚、ホームページなどのインターネット、地域の人、この3つの力を生かして図書館を運営していくことを掲げました。



3世代で閲覧したり選んだりできるように本を配置したエリア

著名人からの寄贈本が並ぶ「北の本箱」

幕別町図書館では、以前から地域に関わる人たちの力が生かされていました。それが1997年に始まった「北の本箱」です。これは本の置き場所に困っている作家や評論家などの著名人から寄贈してもらった蔵書が並ぶコーナーです。幕別町出身のジャーナリスト、故和多田進さんが呼びかけて始まったもので、寄贈者には和多田さんをはじめ、小説家の森村誠一さんや劇作家の平田オリザさん、資生堂名誉会長の福原義春さんなど18人が名を連ねます。すでに3万冊を超える蔵書数になっていて、今でも定期的に新刊を寄贈してくれている人もいるため、図書館の貸出カウンター横に



ある北の本箱コーナーには新刊本を探して必ず立ち寄っていく来館者がいるほどです。

このコーナーで目を引くのが、赤い本が並ぶ書棚の1枠。福原さんから寄贈された本の中から、資生堂のイメージカラーの赤の表紙の本を並べています。こうした書棚を展開できるのも、蔵書管理システムの効率化が大きく影響しています。

「カメレオンコードを導入した背景には、北の本箱の存在がありました。いろいろな方から寄贈いただいた本を従来の請求記号で並べると、ばらばらになってしまいます。贈っていただいた方の人となり、その方が持っている本の空気感のようなものをそのまま並べたいと思いました」と司書の民安園美さんは言います。

こうした展示は日本十進分類法の請求記号をベースにする蔵書管理でも可能ですが、カメレオンコードの導入でかなりの省力化が図られました。また、これまで8日かかっていた蔵書点検が1日で済み、利用者にとっては休館日が減るなどのメリットがあります。

さらに自由自在に書棚の中を変えられることで、北の本箱だけでなく、書棚や展示を独自の発想で展開できるようになり、館内はジャンルやテーマごとに本を自由に並べています。スタッフは蔵書管理の省力化によってできた時間を展示やホームページでの情報発信などに当てられるようになり、時間の使い方が変わったと言います。

地域の人の力を生かす

地域の人の力を生かすために幕別町図書館で取り組んだのが、図書館づくりをサポートしてくれる人たちとのネットワークづくりです。

図書館の重要な役割の一つにレファレンスがありますが、中でも増えているのがまちの歴史などの地域情報の問い合わせだと言います。図書館の活動の中では、地元の関連図書や新聞を集めるだけでなく、多面的な観点でまちの情報を集めていくことも、次の時代に地域の足跡を残していくために重要なことです。そこで、そうした活動を担ってもらうために、地域情報の収集や編集、インターネット上での発信、図書館の書棚づくりやイベント企画などを担う人を募集することになりました。そして、そのための編集力を養成する「Editまくべつ2015 編集力養成講座」を2015年度に開催しました。20名が講座を修了し、その後「まぶさLED（まくべつBOOKサポーター/図書館エディター）」（以下、まぶさ）として、書棚づくりやインターネットでの情報発信など、図書館づくりを住民の視点で支援してきました。ホームページには、まぶさのこれまでの活動やまぶさスタッフが集めたまちの情報などが掲載されています。

また、図書館ではまぶさが担当する展示コーナーを設けています。住民が自ら選書をするので、「認知症」といったより身近で関心の高いテーマで構成されてい



まぶさが選書を担当する展示コーナー

ます。図書館外の人々の視点が入ることで、より利用者の視点で図書館を運営していく、新しい風を吹き込んでいるようです。

幕別町図書館では、これまでも読み聞かせなどの住民ボランティアが活動していましたが、こうした図書館を支えてくれる人たちのネットワークを幅広く広げ、図書館づくりだけでなく、まちづくりにも生かしていきたいと考えています。

図書館と福祉との連携が生まれる

地域の人の力を生かす中で、もう一つ生まれてきたのが福祉分野との連携です。

図書館が本を購入する際は、「装備」と呼ばれる本を保護するために透明なフィルムコートをかけて納品されます。この作業は手間がかかるため、納入は東京の専門業者が担っていました。しかし、2015年度からはすべて地元書店から直接購入しています。地元書店からの提案で、装備作業を地元にある福祉施設に依頼することになったのです。図書館は最初に装備の作業の指導に当たりました。

装備の作業は寄贈本もあるため、図書館の業務を圧迫する作業でしたが、今では障がい者の活躍の場になっています。また、年間5,000冊ほどの購入費が地域の中に循環する仕組みを創出したことになります。図書館と書店、福祉施設が連携して、域内循環と障がい者の雇用を生み出しています。

2013年、地元の幕別高等学校の中に中札内高等養護学校の幕別分校が開校しました。普通高校と高等養護学校が校舎を共有するかたちは道内初で、知的

障がいのある生徒が学んでいます。幕別町図書館では幕別分校の実習を受け入れ、図書の展示や書棚、蔵書の整理などを生徒たちが担っています。

取材で訪問した日も幕別分校の生徒たちが作業学習を行っていました。この日は、幕別町図書館のオリジナルグッズの布バックを作成。キャラクターデザインに長けた司書が作成し

たオリジナルデザインのキャラクターを、1枚1枚シルクスクリーンで印刷していました。ある女子生徒は「インクの量の調整が難しい」と慎重に作業をしていました。このオリジナルグッズは、まぶさと連携し、販売につなげていく予定です。

図書館が地域のさまざまな人たちとつながりを深めることで、まちづくりの触媒役になっていく可能性が感じられます。

図書館が住民の健康をサポート

幕別町は、パークゴルフ発祥の地としても知られています。パークゴルフは世代を超えて楽しめるスポーツで、町民のコミュニティを維持することにもつながっています。こうしたパークゴルフによる健康とコミュニケーションの効果に着目し、2016年度から取り組んで



中札内高等養護学校幕別分校の生徒が担当する展示コーナー。手作りポップとともに本を紹介



中札内高等養護学校幕別分校の生徒たちの作業学習。布のバックにシルクスクリーンでキャラクターを印刷



ストレスチェックコーナー。測定器は本館と札内、忠類の3館を巡回するため、1カ月に各館10日ほど設置される



ストレスチェックの際に結果に合わせて配布しているブックリスト

いるのが「ストレスチェック」事業です。図書館にストレス度合いを測る測定器とストレスケアに関するブックリストを配置。希望者にストレスの測定を行い、結果に基づいてお薦めの本を紹介しています。

2017年度からは、保健課が所管している「まぐべつ健康ポイントラリー」に参加。これは、健康的な生活習慣を身につけるきっかけづくりにしてもらおうと、町が実施する健

診や健康講座などに参加するとポイントがつくもので、ストレスチェックを受けるとポイントが付加されます。

また、ストレス解消に効果的な笑いを事業に取り入れようと、図書館で定期的に落語会を開催するなど、ストレス解消をテーマに楽しい事業もスタートしました。

これらの取り組みは、近隣町にも影響を与えたようです。2016年度から幕別町では池田町、浦幌町、豊頃町とともに十勝東部4町交流連携事業を行ってきましたが、2018年度は健康講座を持ち回りで実施することになり、10月から11月にかけて「図書館と本で健康になろう!」をテーマにそれぞれのまちで講座が開催されました。

また、幕別町は認知症とストレス、池田町は血液や心臓などの循環系、浦幌町は食、豊頃町は発達障がいなど、健康や医療の中でも、それぞれがテーマを決めて図書を分担収集するようになっていきます。分担収

集の成果を生かすために、各町の図書館がお薦めする「健康になる本リスト」も作成し、講座や講演会、館内で配布しています。十勝では管内在住者はどこの図書館でも本を借りられるほか、相互貸借ができるので、読みたい本があれば、住んでいる町の図書館から本を取り寄せることもできます。本を通じて健康増進や予防医療への取り組みが、じわじわと広がっているのです。

活字と笑いで活気あるまちに

これらの幕別町図書館の取り組みは、2016年度から地方創生推進交付金を活用しています。目指すのは、「図書館を核とした活字と笑いで活気あるまちづくり」です。

「単に本の貸出だけでなく、地域の皆さんの居場所になるような図書館づくりをしていきたい」と武田健吾館長。また、司書の民安さんは「時代の要求を受け止めて図書館が変わっていくことも大切ですが、“地域の知”を残して伝えていくことも重要な役目。地域が求めていることに耳を傾けつつ、これまでの図書館の慣習を打ち破ることも必要だと思います」と、地域に必要とされる図書館を探りながら、どのように地域の中で役割を果たしていくかを考えています。

一連の図書館改革の中で、近年は行政からの調べ物の依頼が増えてきたり、「ホームページを見てきました」と新しい来館者が見られるようになったり、その手応えを感じているようです。

図書館を核にしたまちづくりへの挑戦は、まだまだ続いています。これからどんな展開をしていくのか、期待したい取り組みです。



北の本箱をバックに、武田館長（左）と司書の民安さん

● マルシェノルド バックナンバー

- 第1号 「地域経済の自立に向けて」(99年9月25日発行)
- 第2号 「北海道ツーリズムを考える」(00年1月25日発行)
- 第3号 「都市と商業」(00年6月25日発行)
- 第4号 「循環型社会を目指して」(00年10月25日発行)
- 第5号 「地域とアート」(01年2月25日発行)
- 第6号 「地域とIT」(01年6月25日発行)
- 第7号 「北海道の食産業を考える」(01年10月25日発行)
- 第8号 「NPOのあり方考える」(02年2月25日発行)
- 第9号 「北のものづくり」(02年8月25日発行)
- 第10号 「地域経済の自立的発展と観光産業」(03年2月25日発行)
- 第11号 「地域景観とまちづくり」(03年8月25日発行)
- 第12号 「地域と大学」(04年2月25日発行)
- 第13号 「北海道らしいエコツーリズムを考える」(04年8月25日発行)
- 第14号 「地域ブランドの時代」(05年2月23日発行)
- 第15号 「地域と医療」(05年8月25日発行)
- 第16号 「北海道発 産消協働」(06年2月24日発行)
- 第17号 「地域とスポーツ」(06年8月25日発行)
- 第18号 「地方都市の再生」(07年2月23日発行)
- 第19号 「地域と農業」(07年8月25日発行)
- 第20号 「地域と図書館」(08年2月25日発行)
- 第21号 「脱温暖化と地域」(08年8月25日発行)
- 第22号 「社会的企業と地域の活性化」(09年3月24日発行)
- 第23号 「食の安全と北海道」(09年8月25日発行)
- 第24号 「森林と地域再生」(10年2月23日発行)
- 第25号 「地域と福祉」(10年8月25日発行)
- 第26号 「企業の力と地域の活性化」(11年2月24日発行)
- 第27号 「地域航空を考える」(11年8月25日発行)
- 第28号 「震災復興と地域」(12年2月24日発行)
- 第29号 「地域と金融」(12年8月27日発行)
- 第30号 「地域と再生可能エネルギー」(13年2月25日発行)
- 第31号 「沖縄と北海道」(13年8月26日発行)
- 第32号 「東北と北海道」(14年2月25日発行)
- 第33号 「地域とバックアップ機能」(14年8月25日発行)
- 第34号 「地域と公共交通」(15年2月24日発行)
- 第35号 「インバウンドと地域戦略」(15年8月25日発行)
- 第36号 「進化する『道の駅』」(16年2月25日発行)
- 第37号 「地域の建設業を考える」(16年8月25日発行)
- 第38号 「地方創生」(17年2月27日発行)
- 第39号 「長寿社会と地域」(17年8月25日発行)
- 第40号 「地域間連携」(18年2月26日発行)
- 第41号 「シェアリングエコノミーと地域の活性化」(18年8月27日発行)

● 「マルシェ: marché」とはフランス語で市場のこと
で、同音の「マルシェ: marcher」には歩む、行進
する、進歩するという意味もあります。北海道（ノ
ルド: nord=北）が、多くの人々が集い、交流し、活
気あふれる地域へ発展するようにとの願いを込めて、
「開発こうほう」の地域経済レポート特集号として
「マルシェノルド」（年2回、9・3月号を予定）をお
送ります。地域を考えるきっかけとなるように、毎
号、地域経済特有のテーマを取り上げてまいります。

March.2019

No.668

編集後記

若いころの夢は、図書館の近くに家を持って、退
職したら毎日図書館でのんびり過ごす生活でした。
図書館の近くに住むことはできましたが、日々図書
館でのんびり過ごすという夢はなかなか実現せず、
現実には締め切りが迫った原稿書きに追われる悪夢
の場所となっています。(S.K)

どんなテーマでも受け止めることができる図書
館は無限の可能性を秘めている…。今回の取材で
は、そんなことを実感しました。まずは図書館に出
かけて、困ったらレファレンスカウンターへ。もっと
図書館を活用すれば、仕事の効率化も図れそうで
す。(M.S)

● 開発こうほう／地域経済レポート特集号 | KAIHATSUKOHO Regional Economic Report

マルシェノルド

● ご意見・ご感想をお寄せ下さい。

(一財)北海道開発協会広報研修出版部

〒001-0011 札幌市北区北11条西2丁目セントラル札幌ビル
TEL: 011 (709) 5212 E-mail: pr@hkk.or.jp

● (一財)北海道開発協会では、賛助会員を募集しています。
詳しくは、ホームページをご覧ください。

開発こうほう 第668号 平成31年2月25日
発行 (一財)北海道開発協会
編集協力 小磯修二
印刷所 (株)須田製版 不許複製
<http://www.hkk.or.jp/>



- THEME -

【図】

本の向こうに見えてくるもの。
風穴を開けると、
情熱、知る喜び、気づく楽しさを
広げる世界を見せてくれる。

 一般財団法人 **北海道開発協会**

〒001-0011 札幌市北区北11条西2丁目セントラル札幌北ビル
TEL (代表) 011-709-5211

